

学 位 論 文 要 旨

氏 名 吉田満穂

題 目 保育実践における気付き体験に基づく保育者の変容過程と力量形成

保育者は保育実践の中で、瞬間的に子どもの状況や心的状態を察知したり、保育後の振り返りから捉え直したりして、その後の援助や指導に繋げている。保育者自身によるこうした捉えは、日常的に「気付き」と呼ばれ、保育の質向上にも重要である。一方、保育者は日常的に気付きという語を使用しているにもかかわらず、用語・概念として十分に検討され、理解されてきたとは言い難い。そこで本研究では、まず気付きに関わる先行研究の整理と研究の定位を試みた。次に、保育者の自伝的記憶としての気付き体験に関する量的・質的分析から、実証的な知見を導いた。その上で、保育者の気付きに働き掛け、保育者の成長や力量形成に繋げるための支援プログラムを開発し、その効果を検証した。その際、保育実践への自信や見通しに関わる保育者効力感、及びその関連変数に着目し、効果的な保育者支援の方法を提示することを目指した。

本研究全体は、4章構成である。第1章では、まず第1節において研究の背景を述べ、保育の質向上に関する今日的課題を示した。保育の振り返り、子ども理解、保育者の熟達化の視点から先行研究を概観し、保育者の気付きが研究上どのように位置付けられるかを示し、今後、気付きを学術研究として扱うための基礎とした。第2節では、本研究全体に関わる用語の統一、及び倫理的配慮について記した。第3節では、研究目的と内容構成を記した。本研究の全体像を示しながら、保育実践における気付き体験を活かし保育者の変容と力量形成を促す支援プログラムを新たに開発するという目的を説明した。

第2章は、実証的な研究により各節が構成される。本章では、保育者の自伝的記憶としての気付き体験に着目した。具体的には、保育者の気付き体験を広く収集し、量的・質的分析を行い、考察を加えた。第1節では、保育者が自伝的記憶として、何を気付きと捉え、記憶しているかを調査し、保育経験年数における特徴を分析した。これにより、各保育経験年数に共通する気付きの特徴と、経験年数の違いによる特徴が示された。第2節では、面接法により中堅保育者の語りを収集し、質的に分析した。その結果、保育者の気付きの契機が見出され、気付きとそれに伴う保育実践の変容過程が明らかになった。気付きに働き掛けることで保育者の変容を図り得る可能性が示された。第3節では、中堅保育者の語りの特徴について量的分析（テキストマイニング、階層クラスタ分析）を行った。その結果、各保育者の気付き体験は多様でありながら、共通に語られる語があることなどが示された。これらより、気付き体験に働き掛ける支援について端緒を得た。

第3章は、保育者の自伝的記憶としての気付き体験を活かし、保育者効力感を高める保育者支援プログラムの開発を行い、その効果を検証した。第1節では、保育者の気付き体験と保育者効力感との関係を実証し、考察を行った。気付き体験を上げることが出来る保育者は、確かに保育者効力感が高いことから、気付き体験に働き掛け、保育者効力感を高め、保育者の変容に繋げる可能性が示唆された。第2節では、ここまで得られた知見を総合し、保育者効力感を高める支援プログラムを新たに開発した。第3節では、第2節で開発した支援プログラムを実施し、その効果を検証した。その結果、保育者効力感、及び保育者効力感に関わる諸変数において、フォローアップ後に有意な上昇が見られた。その効果は、フォローアップから1か月後の追跡においても確かに維持されており、支援プログラムの有効性が確認された。

第4章は、第1章から第3章までの研究成果を整理し、総括すると共に、今後の課題、及び展望を提示した。第1節では、保育者の気付きの特徴と変容過程に関して、得られた知見を整理し、考察を加えた。具体的には、先行研究から得られた気付きの特徴と、保育者の気付き体験から得られた特徴、及び中堅保育者の気付き体験の変容過程等を整理し、気付きの変容と深まりに関して考察を加え、モデル図を提示した。第2節では、保育者の気付き体験と保育者効力感との関係を捉えた上で、支援プログラムを開発、実施した結果について改めて検証し、保育者の変容と支援プログラムの効果を関連させ考察を加えた。支援プログラムにおいて保育者効力感が高まることと保育者の意識変容は相互に関連しているという示唆を踏まえ、支援プログラムの流れと保育者の意識変容に関わるモデル図を提示した。最後に、第3節では、本研究における今後の課題を示した上で、気付き体験に働き掛ける支援プログラムによる保育者支援の展望を論じた。